

## 中津高校 「あの夏、虹色の雲を見た」

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽

中津高校さんは「虹色賞」です。

各キャラの個性が「色」で表されていて、それがしっかり出ていて素敵だったからです。

「キャストの演技がとても上手で引き込まれた。」「主人公が友だちの色を試すとき、照明が変わるといふ工夫があった。」「前回の劇と異なるところ、工夫されたところは、カフェのメニュー表があったり、ドアのベルを付けたりしていたこと。」「6人の仲の良さは、メインで会話をしているだけでなく、会話していない人の動きによっても伝わってきた。セリフは全体として感情の伝わってくる聞き取りやすいものだった。」というように、講評委員会では、キャストの個性と「色」、それぞれの個性の表現がうまく演技されていたというものが多くありました。

テーマに関わることとしては、「十人十色」「自分の個性を見失ってはいけない。」「みんな違ってみんないい。」「自分は自分でいい」と言うようなことが多く挙げられました。

特に「主人公の個性が崩れていくシーンで胸が痛くなった。」という感想にあるように、この劇は、個性にこだわるあまり、自分の個性を見失いアイデンティティーの危機に陥っていく主人公が、とても痛切な問題として、提示されていました。個性を持つこと、人と違う自分を持つこと、自分だけの「夢」を持つこと、それは大事なことなのかも知れないけれど、それが一つの強迫観念になって、人との違い、人より秀でること、人に認められることがないと、価値のない人間のような無言の圧力を感じながら私たちは、知らぬ間に競争させられているのでしょうか。でも、そんな人間ばかりだったら、疲れてしまいます。

そんな中、主人公は私の色は「白」、だれとでも合わせられる、相手に応じて変わってゆける、そんな「白」が自分の個性だと認めることができ、危機を脱します。認められることだけでなく、相手を認めること、自己主張ばかりでなく、時に相手にあわせて、調和を保っていける「白」。「白」がなければ、どんな色も生きない。その上でいろいろな色が調和を保って「虹色」になるのだと、当たり前だけれどとても大切なことに、この作品は気付かせてくれました。

中津高校の皆さん、おつかれさまでした。

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽